

書評

和辻哲郎 著 「風土 人間学的考察」 岩波文庫（1979年5月初版）

和辻哲郎氏の著作で個人的に一番感銘を受けた書は「大和古寺巡礼」である。この書に親しまれた方も多いのではないだろうか。ところが本誌の先月号（9月）の書評で林・ユタカ・ベルグ著「地球と存在の哲学」を紹介したが、和辻氏がハイデッガー-とならぶ哲学の徒であり「環境世界性」の先人であること知らなかったのは不覚だった。

本書「風土」は1935年（昭和10年）に第1版が発行され、1943年（昭和18年）に改定された。日本では軍部の台頭著しく日中戦争、太平洋戦争へまっしぐらに突っ込んでいった時代である。その時代の色を濃く受けているため今日では読むに耐えない箇所も多いが（特に天皇制、家族制度、対中国民族の評価など）、人間の住む風土の歴史的・空間的世界を切り開いた功績は大きいと評価してよい。

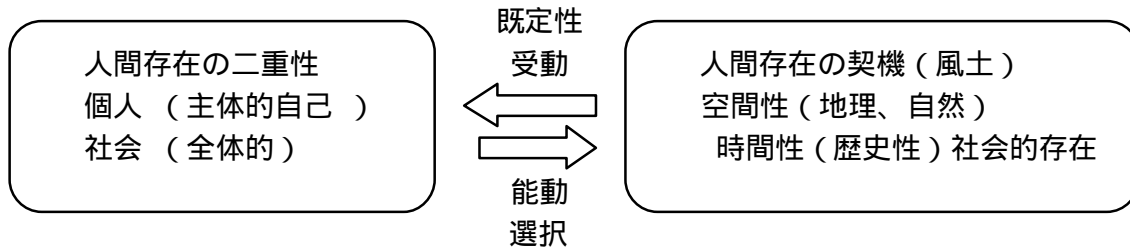
本書は哲学的理論の展開である民族性の比較においてはある意味では「日本文化論」である。日本文化論の系列で有名な著書には本書以外に、梅棹忠夫「文明の生態史観」、ライツァー-「日本歴史の特異性」、津田左右吉「シ思想と日本」、中村元「東洋人の思惟方法」、イザハツダカ（実は山本書店主）「日本人とイザハツ人」等が挙げられる。このように日本文化を論ずる上に自然環境が基本的に重要であるとするとき、和辻哲郎の「風土」は日本文化論の逸することが出来ない労作であろう。

本書が持つ時代の垢は批判するには酷であるが、本書を読んで不満足を感じる点はいくつか挙げることが出来る。

- * 人文地理学的記述にそのまま同意できない独断が随所に見られる。たとえば地理学的風土自体が歴史的であるはずなのに、和辻が記述する自然は一体いつの時代の特徴なのか不明である。林・ユタカ・ベルグも指摘するように和辻が言う「欧州の自然は従順で制御可能」には同意できない。
- * 和辻はもっぱら気候・気質・性格・文化（芸術、神、哲学）・社会制度の関連を考察しているが、科学技術による生産力がほとんど考慮されていない。自然と人間の受動・能動側面を等価に考察していない。それは和辻の「かかる風土に生まれたことの宿命の意義を悟り、それを愛する」というにつきる。それでは発展の視点が脱落し受容しか生まれぬ。日本の芸術の理解はそれでいいかも知れないが、個人の自由、家族、社会、政治、宗教へ展開すれば完全に反動に墮する。
- * この書が大学の講義メモに由来するならば、学術的手続きが重視される。しかし本書は因果関係の論証が随所で希薄であり、むしろ詩人的直感（日本人の最も得意な）によるところが多い。一度納得が行かない論点に合うと先を読む気がなくなるのは私だけではないだろう。

本書の構成は「風土の基礎理論」、「風土の3つの類型（モンスーン、砂漠、牧場）」、「日本文化論」、「芸術の風土的性格」、「風土学の歴史的考察」の章からなる。和辻によると本書は1927年ハイデッガー-の「有と時間」に触発されて生まれた。時間性と空間性を同時に考察し、人間が個人であると同時に社会的存在であることの二重性から人間存在の構造的契機としての風土の特徴を明らかにすることである。風土の時間性を重視すれば「歴史」となり、空間性を重視すれば「地理」になる。風土とは自然環境そのものではない。人間が住む環境としての風土はすでに時間性と空間性を兼ね備えた人間が作り上げた創造物である。これが本書のテーマである。つぎに「風土の基礎理論」と「風土の3つの類型」の章を中心に紹介する。

1) 風土の基礎理論



我々の存在は無限に豊富な様態を持って風土的に規定されるので、風土の型が人間の自己了解の型である。

2) 3つの風土類型

特徴	モンスーン(インド)	モンスーン(日本)	砂漠(中東)	牧場(欧州)
気候	暑熱 湿気 自然の恵みが豊富 自然の暴威 単調な気候	大雨・大雪 四季の移り変わり 熱帯・寒帯の二重性 格(稲、麦) 台風 海洋産物豊富(魚類) 白砂山紫水明の地	荒漠不毛の土地 乾燥 死せる山 水・植物の渴望	夏:乾燥、冬:雨季 冬草の牧草地 南欧の乾燥 西欧の陰鬱 自然の従順(雨・風が少ない) 規則的・合理的な自然の形態
気質・性格	受容的・忍従的 意思弛緩 自然は敵ではない 歴史観の欠如 感情の横溢	受容的・忍従的 移り変わりが早く持久性がない 突発的だがすぐ諦めることを美德とする 夜襲・奇襲が得意 場の空気で大勢順応 死の美德(情死・切腹・神風特攻隊) 戦略性欠如 技術・文化移入が得意	対抗的・戦闘的 意思強固・峻烈 奪略の対象としての自然 人間の作るもののみを信じる 抽象的思考(数学など) 神への絶対的服従(ユダヤ、キリスト、イスラム教)	自然の克服と開放 がキリヤ精神 人間中心的活動 農耕から武士への転換 創造・冒険・征服・権力が生活の中心 西欧の科学精神 近代精神・知性
文化	汎神論的思想 輪廻思想 細部の豊富な表現 直感の明証	親子・家の全体性が絶対的 内(自家屋)を重視 公共概念が皆無 日本庭園・茶・絵巻物・能楽・浄瑠璃・連句・俳句など意気と気合の日本文化の創造	遊牧生活 人格神の命令・道徳が生活倫理 ピラミッド、バビルの塔など人工的美 アラビア美術 装飾的・夢想的	表現性のキリヤ文化 人工的・技術的、合理的なローマ文化 近代絵画 古典音楽
社会	農業と村落共同体 奴隷制・身分社会 非抵抗・非暴力	祭りごとによる統一 家と天皇制 武士道(戦闘的淡泊) 慈悲心	イスラムの世界征服 戦闘的部族組織	キリヤの奴隷制 宗教改革 産業革命と科学主義